

漆器職人

浅田 明彦

Haruhiko Asada

父の想いと先生のアドバイスから
職人、そして経営者の姿勢を学ぶ。

実家が山中漆器の製造販売を生業としていたこともあり、幼い頃から当たり前のように父の後を継ぐと思っていた。高校生になり、卒業後は地元の石川県立山中漆器産業技術センターで学ぶつもりでしたが、「外の世界を見て違う文化に触れてきてほしい、そして山中にはない技術を学んで戻って来てほしい」という父の想いもあり、TASKに入学しました。

TASKでは、毎日手を動かしていれば自然と技術が身につき、どんどん形になっていく面白さや醍醐味を体感できました。学園祭では自分の作品を人にわかりやすく説明する経験もできて、現在の業務にも役立っています。TASKの先生方からさまざまなアドバイスをいただいた中でも「あなたたちは職人を守るような人にならないかん」という言葉が強く印象に残り、職人と二人三脚で歩んでいく気概や姿勢を、TASK在学中に意識するようになりました。

山中漆器を未来へつなげるために
インターン制度プロジェクトを始動。

卒業後、浅田漆器工芸で勤務するようになりましたが、TASKでの学びなど外の世界に触れなければおそらく気づかなかった山中漆器の課題についても考えるようになりました。今、漆器自体は若い人にあまり知られておらず、山中でも若い職人が増えないため職人も減少しています。中でも山中漆器の「叢雲塗(むらくもぬり)」ができる職人は、今や一人しかいません。

そんなとき、TASKの先生の「これで満足だと思ったらそれでおしまいだ」という教えを思い出し、伝統にとらわれず新しい素材や試みを取り入れ工房をさらに発展させていくことを決意。そして、「叢雲塗など山中漆器の伝統と技術を絶やすわけにはいかない」と考えた私は、クラウドファンディングで協力を募り、地元の職人や団体にもお手伝いいただきながら、TASKの在学生などが山中漆器を学べる「山中漆器インターン制度」を設立しました。この取り組みは、まだスタートしたばかりですが、私自身がTASKで身につけた、技術だけではなく人とのつながりを大切にすることを具現化したものです。そして、これからも山中漆器を未来へつなげるために、職人としての探究心、謙遜する心、精神性を持ちながら、挑戦し続けていこうと考えています。

平成31年
内閣総理大臣賞
受賞



アクセサリーなど従来の山中漆器の発想にとらわれない、漆を用いたさまざまな製品開発も構想中。



暮らしの中で身近に使える山中漆器を取りそろえる工房では、絵付けなどの漆器制作体験もできる。

父の想いと先生のアドバイスから
職人、そして経営者の姿勢を学ぶ。



PROFILE
(有)浅田漆器工芸 専務取締役
漆工芸専攻/2008年卒業
小松大谷高校(石川県)出身

竹工芸職人・京もの認定工芸士

細川 秀章

Hideaki Hosokawa

TASKを卒業後すぐに独立、
いつでも誰でも使える竹バッグを考案。

TASKに入学したのは31歳の時。それまで企業で働いていたのですが、好きだったものづくり、その極みと言える伝統工芸をやろうと思ったのです。竹工芸を選んだのは、伝統工芸の中で最も情報が少なく、取っ掛かりが見えなかったからです。それは競争が少ないということを意味していると思いました。学生時代はとにかく技を身につけようと、ずっと練習していました。その一方で、11年ぶりの学生生活を楽しもうと友人たちと集まって話したり、出かけたりもしていました。

そして、卒業と一緒に独立。しばらくは先生や竹材店から依頼されたものを作っていたのですが、今の暮らしにマッチし、もっと使ってもらえる竹工芸品を作ろうと考え、TASKの卒業制作で作ったトランク・アタッシュケースをもう一度作ったのです。竹のバッグというものは昔からあったのですが、それは和装の時に持つもの。それらとは一線を画し、男女も季節もシーンも問わず、いつでも誰でも使えるものをめざしました。

「すごい！」と言われるのではなく、
「欲しい！」と言われたい。

私はものを作る時は「すごい」と言われるものよりも「欲しい」と言われるものを作りたいのです。それはTASK時代から変わっていません。しかし、伝統工芸は周りから見ればどんどん特別なものになってきています。仕事としては特別でも、作るものがあり特別になって欲しくないと思いますね。バッグなのに、ずっと飾られているのではなく、バッグとして使って欲しいです。孫の代まで受け継いでもらって、「これおじいちゃんの」と、使っていた方の姿と一緒に思い出してもらえるのが理想です。

TASK時代、教わっていた先生の一人は「ええもんを作っていたら自然と売れていく」とおっしゃっていました。また別の先生からは「作っているだけでは、今はやっていけない」と言われました。当時は真逆のことのように思っていたのですが、「いいものを作ること」「作るだけでなく考えること」、工芸を生業としている今、どちらもとても大事なことだとお二人の言葉を実感し、噛み締めています。

作ったものを長く愛用していただき、
その人の歴史になるのが理想です。

網代編セカンドバッグ(写真上)は、2018年度全国伝統的工芸品公募展で最高賞である内閣総理大臣賞を受賞。細部にわたるこだわりが高い評価を得ました。

平成30年
内閣総理大臣賞
受賞



細川さんの竹工房
「喜節」で弟子として働く黒木さんも
TASKの卒業生(2019年度)です。



PROFILE
竹工房 喜節 代表
竹工芸専攻/2007年卒業
竹工芸士(編組)一級技能士
京もの認定工芸士(京竹工芸)

東 福太郎

Fukutaro Azuma

TASKがあったから、今の自分がある。
それくらい多くのことを学んだ。

家業である桐たんす店を継ぐための修行としてTASKに入学しました。大学卒業後、22歳の時です。最初は職人になる気はありませんでした。技術を身につけるというよりは、ものを売るために作り方を覚えるというようなスタンスです。それが実習を重ねるうちに負けず嫌いの性格に火がつき、気づけば誰よりも夢中で取り組むようになっていました。先生をライバル視して、先生ができるのに自分にできないわけはないって思っていました。TASKで学んだことは本当に大きいです。技術的なことはもちろん、ものづくりの心構えや日本の文化、先生方との出会い、友人たちとのつながり、すべてが今に生きています。TASKが今の自分を作ったと言っても過言ではありません。

話題づくりという狙いが的中、
そこから世界が一転した。

卒業後、転機となったのは2016年。クラウドファンディングを使って、桐のグラスを作った時です。きっかけは桐たんす業界を活性化させるために、身近な製品を作り、多くの人に桐を知ってもらおうと思ったこと。クラウドファンディングを使ったのは、資金集めがしたかったのではなく、話題づくりです。その狙いが的中し、ニュースで取り上げられ、それを見た新聞社から「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」に推薦されました。ここでグランプリを獲ったら大変なことになる、と笑っていたら、それも現実に。世界が変わりました。そこから家具の世界三大見本市とも言われるイタリアのミラノサローネ、フランスのメゾン・エ・オブジェにも出展。そこで各国のクリエイターや実業家とつながったことで活動の場も広がりました。

このような取り組みに参加しメディアに取り上げられている私を見て、我が子は「カッコいい」と言ってくれています。そのようなイメージが広がれば、後継者不足で悩む全国各地の伝統工芸を救うことができるのではないかと思っています。伝統工芸士を子どもたちの憧れの職業にすること。それが今の私の最大の目標です。

カッコいいと言われる存在になることで、
伝統工芸士を憧れの職業にする。



東さんの代名詞とも言える桐のビア杯。桐たんす業界を盛り上げたいとの思いから不死鳥である「鳳凰」と命名。



メゾン・エ・オブジェにも出展されたスタッキングディッシュ。上から見ると蓮の花に。中央には日本の象徴「富士」というグラスが。



桐を使った生活雑貨などを販売するショップが工房に併設。

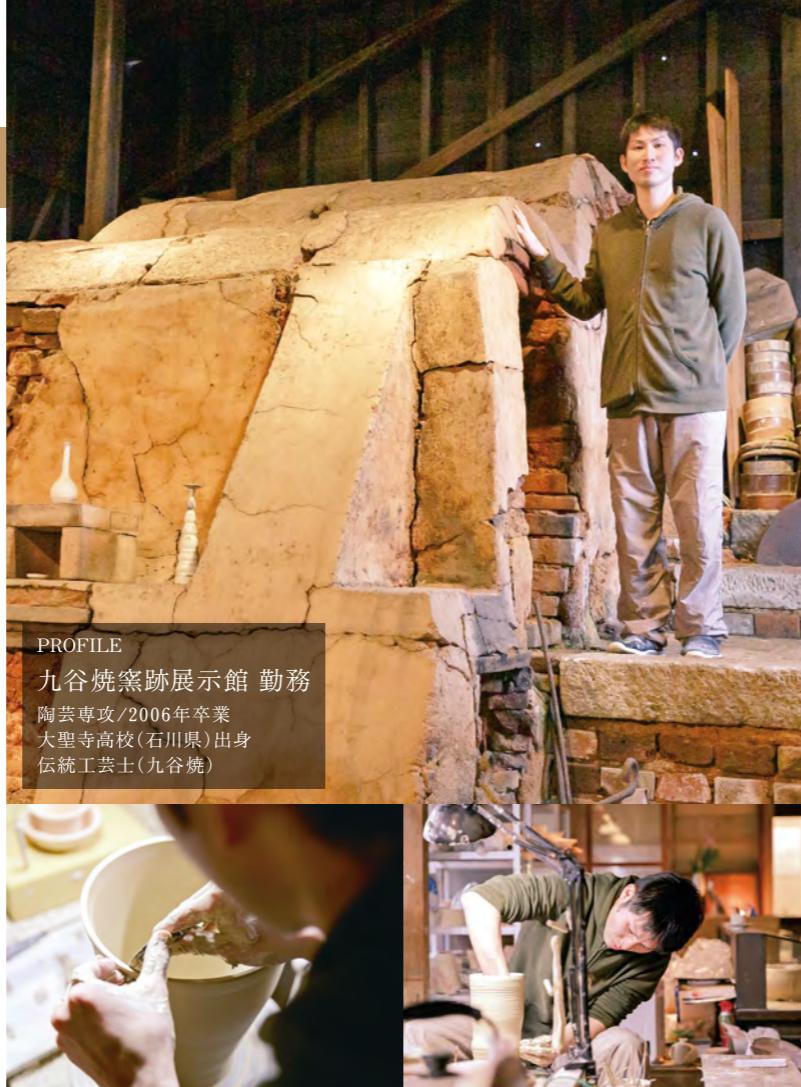


PROFILE
(有)家具のあづま 代表取締役
木工専攻/2007年卒業
粉河高校(和歌山県)→関西国際大学出身
伝統工芸士(紀州箪笥)

前田 昇吾

TASKを卒業後、石川県の工房に就職し、9年間、弟子として腕を磨き、縁があって「九谷焼窯跡展示館」で勤めることになりました。ここは国指定史跡の窯跡や現存最古の窯があり、九谷焼のさまざまな情報を発信する施設です。主な仕事はろくろ体験の指導や解説です。この体験で楽しい思い出づくりのお手伝いができるように心がけています。焼き物職人として仕事をしていると、普段お客様と接することがあります。ここでは目の前で技を披露したり、お話を聞いて焼き物の魅力や面白さを伝えることができます。また来ますと言つて、実際に来てくださる方や、御礼の手紙をいただくこともあります。またその一方で作品制作にも力を入れており、東京や大阪の百貨店などのグループ展やイベントにも出展しています。伝統工芸士にも認定されたので、これからもより多くの方に九谷焼の魅力を伝えていき、陶芸家として作品づくりも精力的に行っていきます。

TASK時代を振り返って
やはり実習に力を注ぎました。
たくさん作ることで感覚をつかみ、
技を習得しました。



九谷焼の歴史の証人である窯跡から、
その魅力と作る楽しさを発信。

荒木 真心

まさか仏像の道に進むとは思ってもみなかったですが、工房を見学させていただいた時に、すごく雰囲気が良く、作品にも魅力を感じたので、お世話になることを決めました。仏像彫刻の経験がないので、戸惑うこともあります。木彫刻の基礎があるので、師匠も教えやすいと言ってくださっています。現在は置物を制作したり、仏像の修復を少しづつ覚えている毎日です。TASK時代、一般企業に就職しようと思った時期もありました。しかし、今はものづくりこそ天職と確信しています。ここで高度な彫刻の技術を覚え、いつか木彫クリエイターとして、木彫刻らしさがありながら生活になじむ作品を生み出したいと思います。

TASK時代を振り返って
学園祭(松葉祭)で自分が作ったものを、目の前でいいねと言ってもらえたことが、すごく心に残っています。



木彫クリエイターを目指し、
仏像彫刻の技を身につける。

生馬 千加

地元の和歌山で働きたいと、1953年創業の老舗理美容専門鍛メーカー「菊井鍛製作所」に就職しました。鍛を作る工程は大きく7工程あり、社内で分担しています。私が現在担当しているのは、溶接されたあとの粗削りの部分。削りすぎると元に戻せませんし、残しきりると次の工程の負担が大きくなります。集中して最適な量を削ることに神経を尖らせています。また、菊井の鍛はオーダーメイドで一丁一丁長さや形状が異なるのですが、設計図などではなく感覚がすべて。常に完成形をイメージしながら作業しています。商品ですので、もちろん微細な傷も許されません。学生時代はひとつずつの作品に時間をかけることができましたが、仕事ではスピードかつ高い精度で作業しなければなりません。そこが大きな違いですね。ベテランの職人でさえ、まだわからないことがあるという奥の深い仕事ですが、早くすべての工程をできるようになりたいです。

TASK時代を振り返って
七宝焼の製作に熱中していました。
休日なども実習室が開いていれば時間の許す限り作業していました。



完成形をイメージしながら、
スピードかつ高精度なプロの仕事を。

永田 知子

一部分ではなく全体を手がける工房で働きたいと思い、ここを志望しました。高校では染色を学んでいたので、友禅の金彩というものをまったく知らず、荒木先生と出会って初めて知りました。金彩は友禅の仕上げ工程ですが、金彩工程だけで柄を表現する工房はありませんだと思います。また、ここでは独自の金彩盛り上げ技法で着物や帯を制作しています。着物はやはり柄が大事です。飾れば平面ですが、身につければ立体物。そこも計算に入れないといけません。新たな柄を考え、先生が認めてくださる時が嬉しいですね。今後はまず先生のアドバイスが少なくなるよう上達したいです。その上で自分のオリジナリティのある画風を作っていくたいです。

TASK時代を振り返って
すべての工程を学ぶことができ、何かも新鮮でした。TASKでの学びは大きな財産になっています。



着物は飾れば平面、着れば立体。
その計算も重要です。



PROFILE
金彩荒木 勤務
京手描友禅専攻/2018年卒業
八幡中央高校(福岡県)出身